阪大病院NEWS
No.72号
OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL
2018(平成30)年10月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所／〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-15
TEL／06-6879-5021
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

手術、検査…キミの気持ち やわらげたい

小児医療センターにウォールペイント

本学とフレンドシップ協定を締結しているガンバ大阪より、昨年、一昨年に引き続き、ガンバ大阪選手会が行った「ユニフォームチャリティーオークション」の売上金から、120万円の寄付を本院の小児医療センターにいただくこととなりました。

その寄付金贈呈式が7月23日に行われ、ガンバ大阪から奥出章寛顧客創造部ホームタウン推進課長、遠藤保仁主将及び林瑞輝選手にご来院いただき、ガンバ大阪選手会を代表し林選手より木村正病院長に目録が手渡されました。

林選手は「このチャリティーオークションも今回で3回目となりました。未来の子どもたちのために役立てていただければうれしいです」と話されました。

また、贈呈式の後には、これまでガンバ大阪よりいただいた寄付金等を基にして、小児医療センターに描かれたウォールペイント「星の船」の完成披露会にもご出席いただきました。

このウォールペイントは、検査や手術に向かう子どもたちを励ます目的でデザインされたものであり、壁に描かれたユーモラスな動物たちが、検査や手術に向かう子どもたちを「星の船」まで導くデザインとなっています。木村病院長から「サッカー選手が、ロッカールームからフィールドに向かう時の気持ちと同じように、このウォールアートが、検査や手術に向かう子どもたちにとって励みになればと思います。ガンバ大阪様からいただいた寄付金で、子どもたちのために、このようなアートが完成しとてもうれしく感じています」とのあいさつがありました。

その後、遠藤選手、林選手は小児病棟に入院中の子どもたちとの交流を楽しまれました。遠藤選手は、「可愛い絵を見て皆さん元気になってください。今日は短い時間ですが、皆さんと楽しい時間を過ごせたら良いなと思います」と話され、子どもたちからの写真撮影やサインの要望に一人ひとり丁寧に応じられていました。入院中の子どもたちにとっては、あこがれのサッカー選手と直接触れ合う、夢のようなひと時となりました。

小児医療センターに描かれたウォールペイント「星の船」

ガンバ大阪選手会寄付

遠藤保仁主将(左)と林瑞輝選手

遠藤選手、林選手とともに記念撮影に納まる木村病院長(左から2人目)と病院スタッフ

手術室2室増設 22室に

ロボット専用も

手術部では平成25年10月に、平成5年の吹田移転以来初めて手術室を18室から20室に増室しました。これによって手術数は年間9千件を超えましたが、その後も日帰り手術や低侵襲手術の増加等により、手術数は右肩あがりで増加しており、平成29年には1万1千件を超え、全国でトップクラスの件数となっています。今後、さらに本院の機能を維持、発展していくためには、手術室が手狭になってきました。

一方、平成30年4月から、ロボット支援下内視鏡手術(いわゆるダ・ヴィンチ手術)の健康保険適用範囲が、従来の腎・前立腺のみから、食道・胃・直腸・肺・縦隔・子宮・膀胱・心臓弁に拡大されました。これまで手術用ロボットは、臨床工学技士によってその都度必要な手術室に搬送・準備されてきました。しかしロボット手術が毎日のように行われると、業務の効率化や機器の保守のためにもロボット専用室が望まれます。

そこで今回、手術室を2室さらに増設しました。これで本院の手術室は計22室になり、すでに平成30年8月から運用が開始されています。手術室21は従来の手術室3に換えて眼科手術向きに装備され、眼科手術は三つの隣接する手術室19から手術室21で可能となり、利便性の向上が図られています。内装色は、同じ構造の手術室20との差別化のためにピンクを基調としました。手術室22はロボット専用室で、従来より面積を広くとり、内装色はブルーを基調としています。

写真左内装の色はブルーを基調としたロボット専用手術室
同右眼科手術向きに装備された手術室21の内装は、ピンクを基調にしている

病院長おすすめ御膳

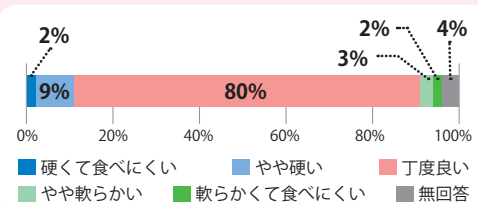
6月5日に病院長おすすめ御膳を提供しました。天ぷらの盛り合わせは、木村病院長自らが試食し、具材をセレクトしました。

「ちりめんご飯と天ぷらがすごくおいしかった」「入院する前に阪大ニュースを読んで、おすすめ御膳のことは知っていました。自分の入院中に食べられてラッキーでした」「糖尿病食なのに白玉団子がついていてとても嬉しかった」(糖尿病食の方にはエネルギーに配慮した手作り白玉団子を提供しました)など、たくさんの嬉しいお声をいただきました。

メニュー
- 病院長お好み天ぷら
- ちりめんご飯
- おすまし
- サラダ
- 白玉団子

病院食アンケート結果

Q 野菜の硬さはいかがですか？



入院患者さんに病院食アンケートを実施しました。満足度を伺った項目では、『満足』『やや満足』『普通』を合わせると、一般治療食80%、特別治療食91%でした。

特別治療食では、より多くの方にご満足いただくため、野菜の硬さについて調査しました。結果は、『丁度良い』と80%の方が回答されました。しかし『硬い』と回答された方が11%、『軟らかい』と回答された方が5%でした。現在、病棟訪問や栄養サポートチーム回診を実施していますので、その際に食事内容を検討し、みなさまに喜んでいただける食事提供に取り組んでいきます。

高校生早期医療体験プログラム

命と向き合う5日間

真剣な表情で手術を見守る高校生たち＝写真提供読売新聞社

心臓血管外科では、昨年に引き続き、医学部を目指す高校生11人を受け入れ、早期医療体験プログラムを実施しました。高校生たちは月曜から金曜までの5日間、早朝から医師と行動を共にして、医療の現場に触れ、「誰のため、何のために医師になりたいのか」を考え、「命と向き合う」ことの重さと責任を学びました。

手術見学では、手術室に特別に許可を得て入室して心臓手術を間近で見守り、また医局では人工血管の縫い合せに挑戦しました。この他、カンファレンスや外来を見学し、病棟では心臓移植を待つ子どもたちと触れ合いました。患者さんやドナーのご家族の思いも、懸命に働く医師の責任も間近で感じとり、「命と向き合う」ことの意味を真剣に考えるきっかけになりました。さらに、iPS細胞から作った心筋シートも見学し、心臓手術など臨床に加え基礎医学の現場にも触れました。医療に携わる厳しさと同時にやりがいを体験し、参加した高校生たちは、「医師になる覚悟」を新たにした1週間となりました。

大阪北部地震を受けての業務継続計画(BCP)の検証

BCPは、医療継続に重大な障害をもたらすこととなる震度6強以上の地震災害を対象に作成しており、その計画内容を全職員で共有するため説明会を行う一方、防災訓練で内容の検証を行ってきました。今後も、防災訓練や各部署での部分訓練を通して計画の実効性を検証する必要があります。

そのような状況下、6月に最大震度6弱の地震が大阪の北部地域で発生しました。

BCPが対象としている災害のような壊滅的被害は発生しませんでしたが、院内外のインフラ被害は病院業務の医療継続に影響を及ぼすと共に、公共交通機関の運行停止や学校・園の休校が医療継続に不可欠な職員の確保に影響することを再認識しました。

今回の災害対応での教訓を今後の防災対策に反映させていきます。

あらゆる循環器疾患に対応

院内外との連携を強化

循環器内科・坂田泰史科長

循環器内科

当科は、日本を代表する循環器疾患の診療施設として、狭心症・心筋梗塞などの冠動脈疾患から、心筋症、心臓弁膜症、不整脈、肺高血圧症など、あらゆる循環器疾患に対応しており、難治性疾患を対象とした先進医療も積極的に推進しています。また平成19年、心臓血管外科と連携して「ハートセンター」を設立し、心不全の総合的・先端的治療を行っています。

新しい取り組みとして今年4月から、MitraClip®（マイトラクリップ）を使用した低侵襲手術「経カテーテル僧帽弁クリップ術」もスタートしました。僧帽弁（心臓の左心室と左心房の間にある弁）が閉まりきらず、左心房に血液が逆流する僧帽弁閉鎖不全症の患者さんを治療するもので、安全性が高く、術後のQOLも改善します。

診療体制としては、「初診外来」と「専門外来」を設けており、来院された紹介患者さんに対しては、まず初診外来で、どのような診療体制が必要かを判断し、そのうえで、心不全外来、弁膜症外来、不整脈外来、成人先天性心疾患外来などの各専門外来において適切な診療を行います。

超高齢社会を迎え、心不全だけでなく複数の疾患で苦しんでおられる患者さんが増加しており、他診療科との連携も重視しています。院内患者さんの急変などに対しては、全診療科の医師・看護師が迅速に協力する「ハートコール」も実施しています。

さらに当科は、循環器医療の人材育成にも力を入れています。医学部生を対象とした臨床実習「クリニカル・クラークシップ」を実施しているほか、重症心不全の診療に求められる高度な知識・技術を培う「重症心不全治療医養成コース」を、全国の若手医師を対象に開設しています。

日本の循環器診療の最後の砦（とりで）として、「患者さんにとっての幸せとは何か」を見据えた診療にベストを尽くしながら、地域の医療機関や多分野の医療関係者とのネットワークを強化し、この大阪から日本のそして世界の循環器医療を作っていきたいと考えています。

糖尿病診療のプラットフォーム

旧七帝大の大学病院初

糖尿病センターでの栄養指導・糖尿病透析予防指導の様子

糖尿病センター

本年4月1日付けで、糖尿病センターが開設されました。旧七帝大の大学病院では初めての「糖尿病センター」です。

糖尿病治療の最終目標は、糖尿病患者さんが、健康な人と変わらない日常生活の質（QOL）を維持し、健康な人と変わらない寿命を確保することです。そのためには、糖尿病特有の細小血管合併症（網膜症、腎症、神経障害）および動脈硬化性疾患（冠動脈疾患、脳血管疾患など）の発症・進展を阻止することが極めて重要です。しかしながら、多くの糖尿病は自覚症状がないため、治療に対して前向きになれない患者さんもおられ、気付いた時には合併症が進展し取り返しのつかない状態となります。

我が国でも、食生活の乱れや身体活動量の低下などに伴い、糖尿病（2型糖尿病）およびその予備軍は増加の一途をたどっています。実際、日本人の糖尿病患者さんも肥満者（BMI 25以上）が約半数に達しています。糖尿病治療には食事療法が大前提になりますが、健全な食生活を日々送っていくのは決してたやすいことではありません。また、適度な運動習慣も取り入れていく必要があります。

糖尿病治療ガイドライン（日本糖尿病学会）において、小児および高齢者の糖尿病については、ライフステージごとの糖尿病として別項として取り扱われており、治療管理目標や栄養指導内容が成人のものとは一部異なっています。小児1型糖尿病では、様々な医療スタッフの多大なる支援が必要となります。肥満に起因する小児2型糖尿病も増加しており、年齢および身体活動レベルに応じた細やかな栄養指導や生活指導が求められています。また、高齢者糖尿病も増加の一途をたどっています。心身機能の個人差が著しいこと、重症低血糖を来たしやすいこと、併存疾患が多いこと、食事制限によりサルコペニア・フレイルといった病態に陥りやすいことなど、治療内容や栄養指導の方針が、成人期とは異なってきます。

このような背景のもと、糖尿病センターでは、栄養マネジメント部、糖尿病ケア・看護外来と共に、糖尿病・内分泌・代謝内科、小児科、老年・高血圧内科を中心に、ライフステージに応じたきめ細やかな糖尿病診療、そして糖尿病合併症予防治療・療養を目指します。また、糖尿病地域連携ならびに院内の糖尿病診療のプラットフォームとして、本院のさらなる発展に尽力したいと思います。

44カ国から500名 第3回閣僚級世界患者安全サミット

第3回閣僚級世界患者安全サミットが4月13日から14日にかけて東京で開催され、44ヵ国の保健省からの政府高官、WHO、OECD、世界医師会等の職員を含む約500名が参加しました。また、厚生労働省医政局総務課医療安全推進室の室長補佐として本院中央クオリティマネジメント部および産科婦人科から出向した中川慧先生が、当該サミット事務局の一員として尽力しました。

初日の専門家によるパネルディスカッションでは、本院中央クオリティマネジメント部の中島和江部長が「ICT（情報通信技術）とレジリエンスの醸成」について講演しました。翌日の閣僚級会議では「東京宣言」が採択されました。本宣言には、各国の医療政策において患者安全を最優先事項と定めること、治療への患者参加を推進すること、急性期病院から地域医療までにおける医療の安全性の向上に取り組むこと等が盛り込まれました。

記念撮影を行う各国政府高官（中央は加藤勝信厚生労働大臣）

国公私立大学附属病院 医療安全セミナー

患医ねっと代表　鈴木信行先生

「平成30年度国公私立大学附属病院医療安全セミナー」（文部科学省後援）を、5月30日から31日にかけて開催しました。このセミナーは、全国の大学病院に所属する医療安全の担当者らに最新の知見を紹介するため、平成16年から本院が毎年主催しています。今回は医師、看護師、薬剤師、事務職員など、計439名の参加がありました。

質向上に最新の知見

今年のプログラムでは、第3回閣僚級世界患者安全サミットで議論された重要課題や、医療政策面から医療安全と患者参加を促進すべく採択された「東京宣言」、データアナリティクスによる周術期医療の質向上の取り組み、患者自身がおくすり手帳やノートを利用して医療者と意思疎通をはかりながら積極的に治療にかかわる「患者協働型医療」についての講演等がありました。参加者一同、医療の質・安全に関する新たな知識を得ることができ、今後の業務に活かすよい機会となりました。

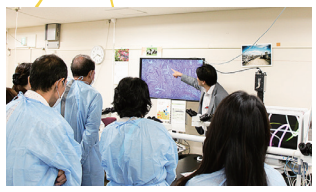
ホスピタル ミニ・ニュース

PHOTO　TOPICS

8/3 高校生1日看護師体験

高校生２名が病棟で看護師とともに患者さんとの対話や血圧測定、検温などを体験しました。

9/26 病院見学会報告



一般市民の方々を対象とした病院見学会を今年も開催しました。

当日は雨天のため、予定していたドクターヘリの見学はできませんでしたが、臨床検査部、病理部やベッド洗浄の様子の見学など普段は見ることができない場所を見学し、参加者からは「病理部では検体のスライドを見ることができ良かった」「ベッド洗浄の様子と臨床検査部の現場が特に印象深かった」などの声をいただきました。

10/12 秋のミニコンサート

第15回市民公開フォーラム 参加者募集

「AYA世代のがんの患者さんたちへの支援」

本院では平成18年度から、一般市民の方々を対象に、がん診療における種々のテーマについて「市民公開フォーラム」を行っております。

AYA世代とは・・・「Adolescent and Young Adult」の頭文字を取ったもので、15歳～39歳の思春期、若年成人を意味します。

◆日　　時　平成30年12月1日（土）
　　午後１時～3時30分
◆場　　所　大阪大学医学部講義棟　A講堂
◆申込期限　平成30年11月28日（水）【必着】
　　参加費無料
◆定　　員　240名（申込先着順）※定員になり次第締切

講演内容について

1. AYA世代とは、その患者さんたちのかかえる問題
　小児科学講師　三善 陽子
2. AYA世代患者さんの精神的な特徴について
　保健医療福祉ネットワーク部臨床心理士　田口 真由美
3. AYA世代の仕事・お金の問題
　特定社会保険労務士　関 孝子　先生
4. AYA世代の妊娠、出産に伴う問題
　生殖医療センター副センター長　瀧内 剛
5. がんから学んだ“ほしい未来”のつくり方
　ダカラコソクリエイト発起人・世話人
　大阪ガス株式会社 近畿圏部 ソーシャルデザイン室
　谷島 雄一郎　先生
6. 質問コーナー

お申し込み方法

FAX、メールまたはハガキに必要事項（❶氏名、❷郵便番号、❸住所、❹電話番号、❺性別、❻年齢、❼参加人数〈4名まで可〉）を明記のうえ、下記までお申し込みください。参加の可否はメールまたはハガキでお知らせいたします。

※注意※
本院では番号非通知の電話・FAXは受信できませんので、頭に186（番号通知）をつけておかけください。
※車いす利用者など、支援が必要な方はあらかじめお問い合わせください。

FAX▶　06-6879-5019
メール▶　ibyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp
ハガキ▶　〒565-0871　吹田市山田丘2-15
　大阪大学医学部附属病院
　総務課　広報評価係

お問い合わせ先　TEL：06-6879-5020・5021